



## イイケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

### 第 653 回 「ビゼーのカルメン」から始まった

2015.11.1



先日あるセミナーの中で、自分の趣味について話すハメになった。いくつかある趣味の中で、一番長続きしているのは、音楽を聴いたりリプレイしたり…かもしれない。もう随分永い間、クラシック音楽を聴いてきた。

4～5歳のころだろうか、我が家には「蓄音機」があった。

確か、グラモフォンを覗き込む「ニッパ」犬で有名な、あのビクター社のものだったと記憶している。SP レコードが何枚かあったが、その中に「ビゼーの歌劇『カルメン』の第1幕への前奏曲」があった。クラシック音楽と言えるものはそれだけ、たった1枚で、何であったのか、未だに全く分らない。蓄音機のぜんまいを手で巻き上げながら、ミシン針のようなレコード針を何度となく取換え、レコード盤が擦り切れるぐらい、何度となく聞いていた。これがクラシック音楽との出会いだった。

小学校の三年生から「ピアノ教室」に通わされた、そう、有無を言わさぬ、強制であった。昭和30年代、当時ピアノのお稽古は珍しく、今思うと全く繁盛しない「お教室」、先生も大変だったろうが、少ない生徒さんの大部分が女の子、男の子は僅か2人だったと、あとで聞いた。当然ピアノが、嫌で嫌で仕方がなかったが、姉の後にくっついて、しぶしぶ通っていた。ピアノを習い始めたと同時に、我が家にどでかいピアノが来た。環境は見事に整いつつあったが、決してピアノは上手くならなかった。

へたくそな腕前でも、何より音符が読めた。

当時、「五線譜」が読める子供、いや、大人も含め、あまりいなかった。

しかもそれを、いつでも「音」として確認できる。

そんなことがうれしくて、それがクラシック音楽にはまり込む元となった。

中学、高校、そして大学まで、吹奏楽やオーケストラの一員として、トランペット、オーボエなる楽器を吹いていたが、生来の怠け者、どちらも決して上手くなかった。

口八丁手八丁の「指揮」が、自分には一番向いている…と思い込んだ。

中学校のブラスバンド、レストロアルモノコ管弦楽団(成城大学)、白百合女子大弦楽合奏団等、夢中になって指揮、しまくっていたかもしれない。

社会人のコーラスにも参加、小澤征爾指揮、新日本フィルハーモニー、東京上野の文化会館でハイドンのオラトリオ「四季」にも出演した。そのライブはレコードになり、今でも私のライブラリーにある。

音楽のおかげで「かみさん」と知り合った。

彼女は中学から一貫してヴァイオリンをこよなく演奏し、その技量はそこそこ達者である。

今でも仲間とチームを作り、演奏会の開催や老人ホームの慰問等を実践している。

私のオヤジは全くの実利主義者、芸術とはおよそ無縁で、愛や浪漫を語るタイプではない。

でも、そのオヤジがいつも言っていた言葉は、かなりの蘊蓄があった。

「芸術は最高のものを観なさい。陳腐な芸風に染まると目も、耳も、頭も、その通りに感染する」

音楽を通し、今、幸せな人生を送ることができるのも、やっぱり、オヤジとオフクロのお蔭なのか、未だ両親には敵わないというべきか、こっそりだが改めて、感謝する次第である。